

第9章 住民による保全活動と景観認知

第1節 地域の活動

(1) 目黒らしさを守る取り組み

1) 目黒の里ホタル愛好会

目黒の里ホタル愛好会は、目黒川の恵みを受け豊かな田園風景が広がり、ホタルの名所として知られる目黒地区のホタルを守り育て、ふるさとの風景を守る目的で平成17年度に発足した地域団体である。ホタルの愛護活動（図9-1-1）はもちろん、平成18年（2006）から継続して実施している地域イベント「蛍の畦道ライトアップ」を開催している（図9-1-2）。



図 9-1-1 ホタルの愛護活動



図 9-1-2 蛍の畦道ライトアップの運営

2) 目黒地区における地藏峠の清掃活動

目黒隧道開通（昭和49年）に伴い、県道沿いに目黒住民によってソメイヨシノが植えられた。現在では90本以上に及び「地藏峠（ジゾウトウ）の桜」として親しまれ、目黒の春を代表する景観となっている（図9-1-3）。なお、桜の植栽は隧道の前後に及んでいるが、目黒の住民は富岡側の植樹地まで草刈やゴミ拾い、桜の剪定作業等を行っている（図9-1-4・5）。寛文5年（1665）にくだされた山争いの判決で、目黒村に榎谷村（現在の富岡）までの道の管理をするよう命じられているが、こうした桜植樹地での清掃作業は藩政時代から続く目黒住民の境界意識の表れなのかもしれない（第5章第1節参照）。年始めのハツギトウで設置されるわら草履と木札も目黒隧道の富岡側入口に設置されており（第8章第3節参照）、興味深い。



図 9-1-3 地藏峠（ジゾウトウ）の桜



図 9-1-4 地藏峠（ジゾウトウ）の桜の剪定



図 9-1-5 富岡側の隧道入口を清掃する目黒住民

2) 目黒緑の少年隊

目黒緑の少年隊は、昭和 54 年（1979）1 月に松野南小学校の生徒で結成された団体で、ホタルの飼育活動や滑床でのアマゴの稚魚放流（図 9-1-6）、目黒地区の清掃活動、目黒川をきれいにする啓発活動等を実施してきた（図 9-1-7）。平成 30 年の松野南小学校の閉校に伴い、松野町緑の少年団が発足し、活動を継承している。



図 9-1-6 滑床でのアマゴの稚魚放流



図 9-1-7 目黒緑の少年隊が作成した看板

3) アイブラック

アイブラックは、目黒地区の若い世代の男女約 25 名のグループで、地域活性化イベントの開催・運営や、部落行事等のサポートを行っている。高齢化する目黒のなかで、地域を元気づけるための行事を積極的に行っており、例えば人が集える場づくりとして花見や夜市（図 9-1-8）、夏祭りといった季節のイベント、文化や芸術に触れる機会を提供するためのレコード鑑賞会（図 9-1-9）や映画鑑賞会、目黒の歴史に触れる機会としての目黒の写真展（図 9-1-10）、目黒の自然を維持するための清掃活動、その他イベント等でのバザー出店等を行っている。また、年に一度、会の女性をもてなすための親睦会（図 9-1-11）も行っており、結束力のある目黒ならではのユニークな取り組みである。



図 9-1-8 夜市



図 9-1-9 南小音楽室でのレコード鑑賞会



図 9-1-10 目黒写真展の準備



図 9-1-11 女性をもてなす会

4) 目黒川を守る協議会

目黒川を守る協議会は、平成 28 年に発足した協議会で、目黒川の環境と生態系を守るため、ウナギやアマゴの放流活動をはじめ、普及啓発として小中学生対象に川遊び体験会や生き物の勉強会等を行っている（図 9-1-12・13）。



図 9-1-12 協議会によるウナギの放流



図 9-1-13 小中学生対象の勉強会

5) 野いちごの会

野いちごの会は、平成20年（2008）に発足した目黒地区の高齢者自主団体で、現在会員数は35名である。元気な高齢者の生きがいづくりを目的に、月1回程度講演会やサロン等を自主的に行っている（図9-1-14）。また、「四万十街道ひなまつり」の目黒ふるさと館開催中は、館内で特産品や手芸品を販売している（図9-1-15）。



図9-1-14 野いちごの会主催の講演会



図9-1-15 野いちごの会による特産品販売

6) ゆきわ会

ゆきわ会は、おおむね65歳以上の高齢者を対象に、自立した生活を支援し、生きがいと社会参加を促進し、介護予防や心身の健康づくりを目的に月1回程度活動している。社会福祉法人松野町社会福祉協議会が生きがい活動支援事業の一環として実施しているもので、体操やレクリエーション、料理などを行っている。

7) 滑床を愛する会

滑床を愛する会は、足摺宇和海国定公園滑床溪谷の啓発活動や環境整備を行おうと平成14年（2002）に結成された団体である。自然体験事業を通じて多くの探勝者に滑床溪谷のすばらしさや貴重さを広めるとともに、遊歩道の点検整備や環境保全活動によって自然保護を推進している（図9-1-16）。また、滑床観察登山と題したツアーを開催しており、滑床溪谷のガイドも実施している（図9-1-17）。



図9-1-16 滑床遊歩道の清掃活動



図9-1-17 滑床観察登山でガイド

8) 消防団・自主防災会

松野町消防団は本部の下に3分団が配置され、その下に各3部ずつ計9部が置かれている。目黒の消防団員は第2分団第3部に所属し、火災や災害発生時における消火活動・救助活動を行うなど地域の防災対策に取り組んでいる。

目黒自主防災会は、地域住民による防災活動を目的とした組織で、防災訓練、啓発活動等を通じて自主防災意識を高める活動を行っている（図9-1-18・19）。地域の防災活動においては特に地域住民の共助が重要であり、これからの安心安全な地域づくりの大きな役割担っている。



図 9-1-18 部落内防災無線の稼働訓練



図 9-1-19 防災無線の機器確認

(2) 目黒らしさを活かす取り組み

1) 蛍の畦道ライトアップ

蛍の畦道ライトアップは、目黒の里ホテル愛好会が主催で平成18年（2006）から継続して開催している地域イベントで、毎年ホテルが飛ぶ初夏の時期に旧松野南小学校を舞台に開催している。地元小学生による風景発表、和太鼓やフォークソング等の演奏、大学生による風景ワークショップ発表、水田の畦道に設置した地元小学生等が作成した灯籠の点灯式、ホテル観察会等を行っている（図9-1-20・21）。また、展示会として目黒の写真展や昔話紹介も行っている。その他、地元有志が中心で飲食物を販売している。



図 9-1-20 蛍の畦道ライトアップ



図 9-1-21 ライトアップされた畦道

2) 四万十街道ひなまつり

四万十街道ひなまつりは、四万十川流域の文化的景観とともにそれぞれの地域ならではの雛人形やひな祭りを楽しんでもらおうと毎年開催されているイベントである。平成30年（2018）から目黒ふるさと館でも開催しており、多くの観覧者が訪れている。館内では目黒の特産品などを野いちごの会のメンバーが販売している。

3) その他の取り組み

民間旅行会社の企画による各種団体の受け入れとして、地域の農家民宿が受け皿となり梅の収穫体験（図9-1-22）や地域の食材を活かした料理を提供したり、都市部の小学生が田舎体験として目黒を訪れた際にグリーンツーリズムクラブが受け皿となって目黒の自然と触れ合う体験を提供した事例もある（図9-1-23）。

また、森の国ホテルと森の国ロッジが民間譲渡され、森の国ロッジは「水際のロッジ」として令和2年（2020）2月にリニューアルオープンした（図9-1-24）。地元産の食材を料理に使用するとともに、滑床の自然を活かしたアクティビティや目黒での農業体験等をプラン化したツアーも実施している。

その他、滑床溪谷をメインフィールドに、天然資源を活用したアクティビティやアウトドアツアー、グランピング等が各団体、事業者によって展開されている（図9-1-25）。特に、リバースポーツであるキャニオニングは、高月花崗岩帯だからこそできる天然のウォータースライダーとして人気を博している。



図 9-1-22 梅の収穫体験



図 9-1-23 都市部の小学生向け田舎体験



図 9-1-24 水際のロッジ



図 9-1-25 滑床溪谷でのキャニオニング

第2節 文化的景観理解へ向けた取り組み

(1) 住民意識の向上を目指した取り組み

地域住民が目黒の文化的景観の取り組みに対する理解や興味を深めることを目的に、ワークショップの開催や調査速報の発信等を行った。

1) ワークショップの開催

これまで4回にわたって住民参加型のワークショップを行った（表9-2-1、図9-2-1・2）。

図9-2-1 実施したワークショップ

第1回	目黒の生活及び生業について
日 時	平成29年2月27日（月）18：00～
参加者	約20名
概 要	目黒における山・川との関わり、農業、信仰について聞き取りを行った。
第2回	目黒の暮らし1
日 時	平成30年9月18日（火）19：00～
参加者	約20名
概 要	「林業・暮らし・祭」に関して、古写真を見ながら模造紙にまとめた。
第3回	目黒の暮らし2
日 時	令和元年5月14日（火）19：00～
参加者	約20名
概 要	「山の植生・山の利用・昔の商店街」について古写真を見ながら聞き取りを行った。また、前段として文化的景観とは何か、目黒の歴史についての勉強会も実施した。
第4回	目黒銀座について
日 時	令和元年9月18日（金）13：30～
参加者	約20名
概 要	第2回で話に出た「目黒銀座」について当時を知る女性に集まってもらい、商店の名前や場所、思い出などについて話し合った。



図9-2-1 第1回ワークショップの様子



図9-2-2 第3回ワークショップの様子

2) イベントでの発信と調査速報誌の配付

調査の進展に併せて、文化的景観の取り組みについて発信してきた（図9-2-3・4）。蛍の畦道ライトアップにおいて文化的景観調査の速報や成果について周知するため報告を行った。また、目黒地区を対象に調査速報誌の配布を行い、住民意識の向上に努めた。



図9-2-3 配付した調査速報誌①



図9-2-4 配付した調査速報誌②

(2) 景観認知

目黒の人々にとって「目黒らしい」景観とは何か。上記のワークショップでは「山」「里」「川」について昔と比べてどう変わったか、または変わらないものは何かをワークショップ形式で話し合った。

1) 「山」に対する景観認知

山の植生の変化に関する意見が多く聞かれた。「シイ・カシがスギ・ヒノキに変わった」や「昔の山は四季があった。春は白く、山桜が咲き、緑に変わっていく。今はずっと緑だけ」という意見である。また、山菜についても「松茸や山芋、アケビなどを採っていたが今は少なくなった」という意見があった。

山の動物についても「狩猟で昔はウサギ、キジ、ヤマドリ等を中心に捕っていて、今のようにシカやイノシシは多くなかった」という。

一方、植生が戻ってきたという意見もあった。「ヤマザクラが減ったが最近戻ってきた」という意見である。ヤマザクラは木管に使われていたが、現在はそれがいないからである。山の管理について、「地藏峠は自分が青年団の時から目黒が管理し山道の掃除もしていた。今もトンネルの向こうの桜の整備、草刈りをする」という意見があり、現在でも部落境の意識とその管理について変わっていないことがわかる。

2) 「里」に対する景観認知

共同で行う行事が多かったことから、忙しかった反面まとまりがあったという意見が聞かれた。「昔は行事が多く、そのたびに鉢盛を作るなど忙しかったが、楽しかった」という意見や「行事のおかげでまとまりがあった」という意見である。

また、目黒銀座にまだ商店がたくさんあった時代を懐かしむ声があった。「郵便局もあるし、警察もあったし、何でもそろった。とてもにぎやかだった」や「今は魚屋1軒（久保鮮魚）と農協だけ。昔は魚屋2軒、飲み屋1軒があった。かつては散髪屋も2軒、映画館も1軒あった」という意見である。

人口減少に対する意見も聞かれ、松野南小学校の閉校について「小学校のチャイムの音が聞こえなくなって寂しい」という意見が出た。

3) 「川」に対する景観認知

川の変化にも敏感なようである。とくに水位の減少や淵が浅くなったことが聞かれた。水位の減少については「戦後の植林のため川の水が減ったのでは」という意見があった。「台風などの大水ごとに河床が変化した」という意見も聞かれた。川遊びをしなくなったという意見もあった。

また、魚類についても意見があり、「ノメルという15cmぐらいの細めの吸盤を持つ魚が30年くらい前は川が黒くなるほどいたが、今はいない」といった意見や、「大きな堰の関係で下組までしか鮎は上ってこない」や「井堰に魚道を付けなかったため魚（鮎）が遡上しなくなった」という意見、「カワニナが少なくなったためホタルも少なくなった」という意見もあった。

川の景観についても認知されており、「護岸工事をした場所が増えたが、していない場所もあり、その景色は変わらない」といった意見があった。

